2008 年 10 月 5 日
第 15 回中日理論言語学研究会
（於 同志社大学 大阪サテライト）

「ノダの意味・機能再考–その文法論的意味と語用論的意味–」

東北大学大学院文学研究科　名嶋義直

１．はじめに

①なぜ語用論的視点が必要か

１）文・発話（以下，「文」で代表）を産出する際，話し手は何らかの文脈を設定していると考えられる。

２）文を解釈する際，聞き手は何らかの文脈を設定していると考えられる。

３）言語形式の中には語用論的な視点から考えなければ正用・誤用・非用を判断できないものがある。

→文の意味を考える際，語用論的視点を取り入れることは有益であると予想される。

②本発表の内容

１）ノダの語用論的意味と文法論的意味を検討する。

２）ノダに関する考察を通して，日本語学研究において語用論的視点を取り入れることの重要性を確認する。

２．考察の背景

2.1. 日本語学における先行研究

①田野村（1990）

１）ノダは「ある事柄αを受けて，αの内実はこういうことだ，αの背後にある事情はこういうことだ，といった気持ちで命題βを提出する」。(p. 5)

２）４つの使用条件（pp. 8-14）

・承前性：ノダ文の発話に際し，何らかの先行発話や状況が存在し，それを受けてノダが使用される場合が多いこと。

・既定性：提示する命題の真偽が話し手にとって既に定まったものであること。

・披歴性：提示する命題内容が聞き手にとって容易に知り得ない内容のものであること。

・特立性：他の命題から提示する命題を際立たせるものであること。「この命題こそが」という提示の仕方。

②益岡（2007）

１）「叙述様式説明」，「事情説明」，「帰結説明」，「実情説明」，「当為内容説明」という用法がある。

２）それぞれに「新規知識の獲得の側面が問題にされる『認識系』」と「既定知識の伝達の側面が問題にされる『伝達系』」の２種類がある。(以上，pp. 85-95)

③野田（1997）

１）ノダの分類：「スコープの『の（だ）』」と「ムードの『のだ』」に大別。

・「スコープの『の（だ）』」：その前の部分を名詞化するために用いる。

・「ムードの『のだ』」：以下の４つに下位分類される。（p. 71 の（カ）を発表者が再構成したもの）

「対事的関係づけの のだ」：先行文脈や状況の「事情・意味として」Ｑを把握する。

「対人的関係づけの のだ」：先行文脈や状況の「事情・意味として」Ｑを提示する。

「対事的非関係づけの のだ」：ある事態を既定の事態としてＱを把握する。

「対人的非関係づけの のだ」：ある事態を既定の事態としてＱを提示する。

・「関係づけ」

「ＱをＰ（状況や先行文脈。言語化されるとは限らない）と関係づけて把握，提示する」。（pp. 71-72）

④先行研究のまとめと問題点

１）先行研究のまとめ

・ノダは＜あるコトを＞＜既定命題として＞＜状況や先行文脈と関係づけて提示することで＞＜課題に対する解答（説明）を行う＞。

２）先行研究の問題点

ノダ文を充分に説明できるだろうか。

（１）はじめまして。

東北大学の名嶋義直と申します。

仙台から来たんです。

今日はこの場でノダについてお話をしたいと思うんです。

今日のお話が少しでも皆様の何かのお役に立てばと思っているんです。

・承前性，既定性，披瀝性，説明性，関係づけ等，先行研究で指摘しているノダの特徴が認められるし，使用条件にも合致しているのではないか。

・しかし実際には「先行発話の意味として」「原因や理由として」考えにくく不適切な使用と判断される。ノダ文の解釈には語用論的推論が関与していると考えられる。

→意味論的考察とその記述だけでは不充分である。語用論的考察と記述が必要ではないか。

2.2. 語用論的考察の有効性

①観察１：ノダは，構文的に非文となる場合を除いて，基本的には如何なる文にも用いられうる。

→文のレベルにおける構文的観点からの考察には限界がある。

②観察２：ノダ文の解釈において一種のつじつま合わせが行われている。

（２）Ａ：[友人が一瞬居眠り運転をしたので]「大丈夫？」

Ｂ：「昨日寝てないんだよ，論文で」

→理由を表しているか帰結を表しているか，どの発話と関連づけるべきか等は，送り手の発話意図とは別に，受け手によって語用論的に決定されていると考えられる。

③観察３：受け手はノダの存在により，つじつまの合う解釈を志向する。

（3）［遅刻した学生とのやりとり］

教師：遅いね。

学生：隣のおじさんが寝坊しました。

（4）［遅刻した学生とのやりとり］

教師：遅いね。

学生：隣のおじさんが寝坊したんです。

→（3）は「状況」と「発話」とが噛み合っていない（焦点がずれている）と判断され許容されないのに対し，（4）は提示されている命題が「理由として妥当であるとは考えられない」ため許容されないと考えられる。

→両者の構造上の違いはノダの有無だけである。命題内容（ノダを取り除いた部分）は同一であることを考えると，ノダの存在にその「解釈の方向の差」を生じさせる原因があると思われる。

2. 3. 問題解決のために：語用論的視点からの考察

・関連性理論の知見を応用し，聞き手の発話解釈という観点から考察する。

1）現時点で優れた語用論理論であると評価されている。

2）普遍的な原理であるゆえ個別言語の個別言語形式にも応用可能であると考えられる。

3）いくつかの考え方がノダ文の研究に有益であると考えられる。

3．関連性理論：Sperber & Wilson（1986/1995）を中心に

3.1. 関連性理論概説

①関連性の原則（principle of relevance）

・関連性の原則１：人間の認知は，関連性が最大になるようにできている。

・関連性の原則２：すべての意図明示的伝達行為は，それ自身の最適の関連性の見込みを伝達する。

(p. 260)

②最適な関連性（optimal relevance）

・意図明示的刺激は受け手がそれを処理する労力に見合うだけの関連性がある。

・意図明示的刺激は伝達者の能力と優先事項に合致する最も関連性のあるものである。 (p. 270)

③関連性（relevance）

・個人にとっての関連性（分類的）

想定は，ある特定の時点で，ある個人にとって呼び出し可能な文脈のひとつないしそれ以上で何らかの正の認知効果をもっていれば，そして，その場合に限りその時点でその個人にとって関連性をもつ。

・個人にとっての関連性（相対的）

程度条件 1：想定は，それが最適に処理された時に達成される正の認知効果が大きいほど個人にとって関連性がある。

程度条件 2：想定は，このような正の認知効果を達成するのに必要な労力が小さいほど個人にとって関連性がある。 (共にp. 265)

④文脈（context）

「心理的な構成概念（psychological construct）で，世界についての想定の部分集合である」(p.15)

⑤文脈効果（contextual effect）

「文脈含意」,「強化」,「却下」の３種類。

（５）状況Ｐ：雨が降っている。

文脈Ｃ：雨が降ったら，運動会は中止である。

文脈含意Ｑ：運動会は中止である。

（６）Ｐ：雨が降っている。

Ｃ：雨が降っているだろう。

Ｑ：（やっぱり）雨が降っている。

（７）Ｐ：雪が降っている。

Ｃ：雨が降っているだろう。

Ｑ：雨は降っていない。雪が降っている。

⑥本発表における「関連づけ」の定義

・関連づけとは，ある状況を認知することによってある想定Ｐを形成し，その想定Ｐとある文脈Ｃとを組み合わせ,「文脈含意」,「強化」,「却下」のいずれかの「文脈効果」に該当する想定 Q を得る推論行為である。

⑦表意（explicature）

・指示表現の同定，一義化，富化／飽和

（８）この数日，テレビはオリンピックばかりだ。

（９）2008 年 8 月 21 日を含むこの数日間，テレビ番組は北京オリンピックに関係するものが非常に多い。

(10) 家からその公園までは少し距離がある。

(11) 思っているより遠い。

(12) 彼女は彼に鍵を渡した。彼はドアを開けた。→「その数秒後，その鍵を使って」

(13) その学生は侮辱された。彼は学校をやめた。→「その侮辱されたことが原因で」

⑧高次表意（higher level explicature）

・「発語内行為の力／命題に対する捉え方」を組み込んだ表意。

(14) 明日は雨だ。

a. 話し手は明日雨が降ると主張している。

b. 話し手は明日雨が降ると推定している。

c. 話し手は明日雨が降るという伝聞情報を述べている。

⑨推意（implicature）

・「暗に」伝達を意図されていること。

(15) A：今度の学会で発表できるかな。

B：君のテーマはあの学会好みじゃないよ。

(16) Aは2008年12月の〇〇学会で発表できない。

⑩概念的意味（conceptual meaning）と手続き的意味（procedural meaning）

・概念的なコード化と手続き的なコード化。

(17)［大荷物を抱えて帰宅した夫に］So, you spent much money.（Blakemore, 1988, p.189 (13)）

3.2. 関連性理論とノダ研究

3.2.1. 武内（1994）と内田（1998）

①武内（1994）の論考

(18)（遅刻した学生が）寝坊です。 (p. 9 (20))

のだの使用から私（(18) の聞き手である教師，発表者注）はその発話の命題が，私が既に入手している命題（遅刻してきたこと）の文脈含意であることを仮定するのである。関連性の原理が話し手は聞き手である私に適切な文脈効果を最小の労力で与えるように努めたと私に仮定させることで，(20)（上の (18) に該当。発表者注）は関連性を有すると説明される。(p.10)

武内の主張は (18) の命題「寝坊したコト」がノダを用いて発話されることによって (19) の文脈含意Qとして理解されることになるという主張であると考えられる。ノダを与えられた二事象間の関係(ある事態と文脈含意という関係)を明示的に表示する談話連結語の一形式として位置づけている。

(19) 状況P：学生が遅刻して来た。

文脈C：学生の遅刻の理由で多いのは寝坊である。

文脈含意Q：この学生が遅刻したのは寝坊したことが原因だ。

②内田（1998）の論考

ノダは「話者の主観的判断を表す解釈的用法のマーカーである」(pp.245-246)。

「(の) だ」は何らかの「話し手の関与」を暗示するものであり，その方向に聞き手の注意を向ける働きがあるのである。この点で，関連性理論でいう，手続き的 (procedural) 意味をもち，聞き手が高次表意を復元するのに貢献するのである。(p.249)

議論のポイントは「描写的用法 (descriptive use)」と「解釈的用法 (interpretive use)」の区別と「解釈的用法」における「解釈項」と「被解釈項」間の「類似性」。

(20) A：［太郎が歩いてくるのを見て］名嶋が来た。→描写的用法

(21) A：［太郎が歩いてくるのを見て］名嶋が来た。→描写的用法

B：［Aの発話を聞いてCに］名嶋が来たって。→解釈的用法

C：［Aの発話を聞いてAやBに］いい加減な奴が来た。→解釈的用法

(22) A：［語用論に興味が全くないBに］語用論は面白いよ。→描写的用法

B：［全く興味なさそうな口調で］うん，語用論は面白いよ。→解釈的用法，類似性大

C：［その通りという口調で］うん，意味論はつまらないね。→解釈的用法，類似性小

3.2.2. 問題点

①ノダが提示するのは「文脈含意」,「高次表意」に限らない。表意，高次表意，推意の異なる３レベルで機能する。強化や却下の文脈効果を持つ文でも機能する。

(23) それ，私です。私なんです。 (NHK『ちゅらさん』2001.4.28)

(24) 探すんじゃない。創り出すんだ。 (学内の立て看板)

(25) A：あのう，1・2年生にサークルの案内をしているんですが…

B：僕，［院生なんです／院生なんです］。 (後者のみ実話)

② ノダの持つ手続き的意味には限界がある。

「事態のスキーマ」とどの程度一致・類似するかというカテゴリー判断がノダの使用や解釈に関わっていると考えられる。

(26) ［遅刻してきた学生が］バスが［遅れました／遅れたんです］。

(27) ［遅刻してきた学生が］隣のおじさんが家を出るのが［遅れました／遅れたんです］。

(28) ［遅刻してきた学生が］犬のポチがご飯を［食べませんでした／食べなかったんです］。

４．考察１：語用論的意味

4.1.「既定性」から「文脈の改変」へ

①「既定と捉えていること」がノダの使用に関係する。

「予想もしない事態に遭遇した」場合や「突発的に生じた事態」を言語化する場合，事態が「すでに定まっていたかどうかなど考える余裕はないので」ノダが用いられない。(田野村,1990,p.28や野田,1997,p.80)

(29) ［出かけに外に出て］あっ，雨が降っている。

(30) ［出かけに外に出て］あっ，雨が降っているんだ。

(31) ［餌をやろうと犬小屋を覗いて］あれ，ポチ昼寝している。

(32) ［餌をやろうと犬小屋を覗いて］あれ，ポチ昼寝しているんだ。

②「既定性」をノダの使用基準とすることは妥当だろうか。

(33) ［残しておいたケーキがなくなっているのを見て］あっ，誰かが食べた。

(34) ［残しておいたケーキがなくなっているのを見て］あっ，誰かが食べたんだ。

(35) ［しんしんと冷え込むので外を見ると］あっ，雪が降っている。

(36) ［しんしんと冷え込むので外を見ると］あっ，雪が降っているんだ。

(37) 明日はどこに行くんですか。

–梅田に行くんです。

(38) 明日はどこに行くんですか。

–梅田に行きます。

③ノダの使用基準は「既定性」とは異なるものである。

１）ノダが用いられる場合

ある事態の知覚によって話し手が持つ文脈が改変された場合，その事態認識を「文脈を改変させ

ることになった事態として」提示する場合ノダを用いることができる。

2）ノダが用いられない場合

ある事態の知覚によって話し手が持つ文脈が改変された場合であっても，単に事態描写を行う場合，ノダは使用されない。

(39)［一人で泣いている子供を見て］きっと迷子になったんだ。　(庵他, 2000, p. 270)

(40)「ここには誰も住んでませんよ」

「ふーん，空き部屋なんだ」　(野田, 1997, p. 82)

(41)［ビールを飲んで］「うまいんだな，これが」　(野田, 1997, p. 82)

話し手にとっては「既存の知識」であるが，聞き手にとっては「文脈を改変する」ことになる場合は次のような発話でもノダが用いられうる。

(42) 昨日は学校を休みました。頭が痛かったんです。　(庵他, 2000, p. 270)

(43) 昨日は学校を休みました。頭が痛かったです。

(44) 今日，私は大学を卒業した。明日からは学生ではないのだ。　(庵他, 2000, p. 273)

(45) 今日，私は大学を卒業した。明日からは学生ではない。

(46) A：［コピーしている人に］あと，どのくらいかかりますか。

B：［コピーカードを抜きながら］もう終わったんです。　(実話，B は留学生)

(47) A：［コピーしている人に］あと，どのくらいかかりますか。

B：［コピーカードを抜きながら］もう終わりました。

④既定命題と「文脈の改変」との関係

・関連づけに必要な要素

P：新たに知覚した情報（発話，事態等）に対する認識

C：文脈想定集合の一部

Q：新しく導き出された想定

・関連づけを構成する三者は全て既定性を備えた既定命題という性格を有している。

・ノダ文における既定性は，関連づけに必要な三要素が当然の帰結として持ちうる性格であり，副次的な特徴と言うべきものであって，本質的な特徴ではない。

・「文脈の改変」という視点を取り入れれば「既定性」，「既定命題」という考え方に依拠しなくてもノダ文の記述が可能である。

4.2. ノダの意味・機能

4.2.1. ノダの意味・機能の提出

①「解釈」を手掛かりに

(48) A：おもしろいデザインの靴ですね。

B：エドヤストアで買ったんです。

（スリーエーネットワーク『みんなの日本語』初級Ⅱp. 2 の例文 2 を一部変更）

1）(48) では話し手 B のノダ文は聞き手 A の発話に対する応答を提示している。

2）B は A の発話を「どこで買ったか」という観点から解釈している。つまり，ある発話に対して応答することは，聞き手によって発せられた先行発話を話し手が「ある観点」から「解釈」するこ

とである。

3）つまり，(48) B では「話し手 B がその靴をエドヤストアで買った」という事態が「先行発話に対する話し手 B の解釈として」提示されている。

4）関連性理論では疑問文を「その答えが真ならば（誰かにとって）関連性がある，と話し手がみなす答えに対する解釈」と位置づけている（Sperber & Wilson,1995,p.252，今井,2001 も参照)。

5）「『疑問文』は『それに対応する答え』に対する，ある一つの解釈の表示である」ということは「『答え』は『それに対応する疑問文』に対する，ある一つの解釈の表示である」ということでもある。

6）ある命題を「聞き手の発話した先行発話に対する応答として」提示することは，先行発話と応答との間に「解釈の対象-解釈」という関係を構築することになる。

7）先行発話を発した聞き手に対して応答を提示することは，話し手側から見れば，ある命題を「先行発話（働きかけ）に対する話し手の解釈（応答）として」提示していることになる。

8）聞き手側から見れば，その命題は「聞き手の働きかけ（先行発話）に対する応答である」という点と，「聞き手による『話し手の思考の解釈（質問)』に関係する情報である」という点において「聞き手にとって関連性のある『話し手の思考の解釈』」という特徴を持つことになる。

9）つまり，聞き手側から見れば「ある命題」が「『話し手の思考に対する聞き手側から見た解釈』として」提示されていることになる。

10）ノダ文ではある命題が「聞き手側から見た解釈として提示されている」と考えることができる。

②「ノダの手続き的意味」を手掛かりに

1）ノダの使用は提示された命題が，a：「事態」ではなく「思考の解釈」であること，b：「解釈間の範列的（‘paradigmatic’）関係における優位性」を有すること，の二点を表すことになる。

2）それゆえに，ノダの使用は聞き手の発話解釈の方向を制約する機能を持つ。

③「ノダの意味・機能」

・ノダの意味・機能

ノダは，ある命題を「聞き手側から見た解釈として」「意図的に，かつ，意図明示的に」「聞き手に対して提示する」。(名嶋,2007,p.83)

・ノダが「表す」とされてきた「具体的な命題間の関係（因果関係，説明-被説明など)」はノダによって明示的に表されるものではなく，聞き手の発話理解過程において語用論的に復元されることで伝達されるものである。

4.2.2. 利点

①利点１：ノダが関与する「関連づけ」とは何か。なぜノダが「関連づけ」を表せるのかを説明できる。

1）「ある解釈」が存在するということは，解釈される思考・発話の存在が前提とされることになる。

2）ノダで提示された「解釈」を受けて行われる聞き手の発話解釈過程は，提示された「解釈」が如何なる思考や発話の「解釈」であるかということを話し手とは逆の方向から同定する作業である。

3）言い換えれば，聞き手が行うノダ文の発話解釈とは，提示された命題を，まず「何らかの思考や発話の解釈として」受け入れ，その前提のもとで，聞き手にとって「最も関連性のある解釈とし

て」位置づける（自分にとって最も関連性を持つ解釈を推論する）ことである。

4）したがって，ノダ文は「解釈の対象」である「関連のある思考・発話」の存在を前提とすることになる。そのため，聞き手である我々は，あたかもノダが「何か」との関連づけを表しているとみなすことになる（それがノダ文の伝達する最適な関連性の見込みである）。

5）つまり，関連づけはノダによって明示的に伝達されるものではない。話し手が行うのはあくまで「聞き手側から見た解釈として」の「意図的な，かつ，意図明示的な」「聞き手に対する提示」である。

6）しかし，「解釈」というものが「解釈された対象」の存在を前提とするため，聞き手は「当該解釈」を逆の方向で「関連づけ」ようとする。

7）ノダが表すとされてきた「関連づけ」は，聞き手によって発話解釈過程の中で復元されるもの（より厳密にいえば，「作り出すもの」，「見出すもの」）であると考えるべきである。

②利点２：ノダ文の持つ種々のニュアンスはどこから生じるのかを説明できる

［押しの強さ／抗弁］

(49)［学生２がコピーをしており，学生１が順番待ちをしている］

学生１：どれぐらいかかりますか。

学生２：［コピーカードを抜きつつ］もう終わったんです。　　（実話，学生２は留学生）

(50) もう終わりました。

1）(49) と (50) との違いはノダの有無だけである。本稿の考え方で言えば，「聞き手側から見た解釈として」「意図的に，かつ，意図明示的に」提示しているか否か，という違いだけである。

2）文脈の改変は，(50) においては，話し手の発話を「解釈」し，自身の旧想定と「対照」し，旧想定を新想定に「置き換える」という聞き手の認知プロセスを経て行われるのに対し，(49) の場合は，ある命題が「聞き手側から見た解釈として」「意図的に，かつ，意図明示的に」提示されているため，いわば「置き換えるべき解釈」が「自ら解釈し対照する」といったプロセスを経ずして提示されることになる。つまり，聞き手は「話し手の発話の『解釈』」も「自身の旧想定との対照」も行うことなしに，具体的な「置き換え」を求められていることになる。

3）この場合，「コピーが終わったこと」は様子から見て既定である。「分かりきっていることをあえて（または故意に）分からせようとした」と聞き手に見なされた場合は「押しの強さ」が生じ，「そんなことは分かっている。念押しされるまでもない」と聞き手に見なされた場合は「抗弁」や「嫌味」というニュアンスが生じる。

4）(50) は「事実描写」だけで「置き換え」を求めているわけではない。したがって，(49) のようなニュアンスは，相対的にみて，生じない。

5）ノダの使用が「聞き手側から見た解釈として」「意図的に，かつ，意図明示的に」「聞き手に対して提示する」ことによって，聞き手自身のことに関する「話し手の解釈」の受け入れを「聞き手に押しつける」形になったり，状況によっては「聞き手の思考」を話し手がぶしつけに「解釈」したことを結果的に示すことになったりする場合がある。

［親近感／一体感］

(51)「これぐらいの大きさのベッコウの櫛おくれ」

「ありません」　　（尾上圭介, 1999,『大阪ことば学』, 創元社, p. 34）の例文を一部変更）

(52)「これぐらいの大きさのベッコウの櫛おくれ」

「ないんです」

1）ノダを用いて提示することによって「聞き手にこの『解釈』を受け入れさせよう」という話し手の伝達態度が，ノダを用いずに提示する場合に比べて，より明示的に伝達される。

2）一方から見れば「『解釈』を共有させよう」という態度と見なされ，共通の理解に至ろうとする「親密感」や「一体感」を聞き手に感じさせる。逆の観点から見れば「『解釈』を受け入れさせよう」という「一方的」な態度ともなる。ノダが「やわらげ」と「押しつけ」・「強調」という正反対とも言うべきニュアンスを併せ持つのはそのためである。

③利点３：ノダの使用条件が記述できる

1）ノダの使用条件に関して：

ノダにはいくつかの語用論的な使用条件があり，それを満たしていると受け手に解釈されれば許容される。しかし，その使用条件を満たしていないと受け手に解釈される場合には，語用論的に許容されない（「文法的に許容されない」のではない点に注意が必要）。

2）［ノダの使用条件］（名嶋, 2003, p. 40，但し発表の都合上，記号を変更し一部順序を入れ替えた）

(A)「ある命題」を先行文に対する「受け手側から見た解釈として」提示することを受け手にはっきりと示したいと意図している場合，ノダを用いると効果的である。送り手の発話意図を明確化することが可能となるからである。

(B) 単なる「事実・事態の描写」を意図する場合には，ノダを用いない方がよい。

(C)「ある命題」を先行文に対する「受け手側から見た解釈として」提示することで，積極的に受け手を納得させたり受け手の考えを変えさせたりすることを送り手が意図する場合，ノダを用いると効果的である。

(D) 他の言語形式の使用から先行文に対する「受け手側から見た解釈としての提示」であるとみなすことが容易な場合はノダを用いても用いなくともよい（用いると「受け手側から見た解釈としての提示」であることがより明確に伝達される）。

５．考察２：文法論的意味

5.1. 名嶋（2007）の批判的検討

①ノダの本質的な意味とはなにか：語用論的意味と文法論的意味の区別

1）「ノダの意味・機能」の定義が「話し手／聞き手」や「聞き手に対して提示する」という観点を取り入れた形で行われている。「文は『聞き手に対して』発話されることで成立する」という言語観に立っているように見える。果たしてノダの本質的意味を記述していることになるのか。

2）「『話し手–聞き手的な現場で文が使われる以前に文は文として一つの意味を背負って独立に存在しているのであって，その文の構造を論ずることが文法論である』という文法観」（尾上, 1990, p. 13）がある。

→具体的な状況と切り離してノダ文それ一文を見た場合にも非ノダ文とは異なる固有の意味が存在する。ノダ本質的意味を記述するためには，その文法論的意味を，話し手・聞き手や文脈情報等の観点を取り入れずに記述することが求められる。

②論旨の不明瞭さ

「解釈として」という部分の「解釈」というものが何を意味しているのかがわかりにくい。「話し手」や「聞き手」という観点から離れた時に「解釈」というものはどう記述できるのか。

5.2. ノダの文法論的位置づけ

5.2.1. ノダの文法論的意味

①「概念化する」ということ

１）ノダは後接する対象を「の」でひとまとまりのものとして体言化し，「だ」で断定をする。

２）なぜ「の」で体言化するのか。

・「体言とは，素材概念を表示する以外に，構文的職能をもたない」（山口, 1976, p. 166）

・「『の』によって括られることで，叙述内容は＜文そのもの＞ではない＜文の材料＞となって，文の成立以前から自存する確かな＜知識の一項目＞となるのである」（吉田, 2000, p. 20）

３）「概念化」

・「体言は概念をあらわす語なり。−中略−実に吾人が胸中に於いて一の概念として思惟するものは悉く体言たることを得るなり」（山田, 1936, p. 92）

・事態と概念

事態：「現実世界のできごとに記述を与えたもの」

概念：「頭の中にある思考に記述を与えたもの」

(53) 今日はお休みです。→事態

(54) 今日はお休みな<u>んです</u>。→概念＋ノダ

４）「事態をそのまま」捉えるか「概念（思考）化して」捉えるか

・先行研究はこの二つの「今日はお休みだ」を明確に区別して位置づけようとはせず，無批判にノダの後接する命題を現実世界の事態と捉えてきたのではないか。

・「現実世界のできごとに記述を与えたもの」が発話時において既に頭の中に存在する場合もある。(55)のような言い方はそれを表している。つまり，当該命題が「既定である／既定ではない」ということはノダ文と非ノダ文との根本的な違いではない。

(55) これまでに何回も言っておりますが，今日はお休みです。

(56) これまでに何回も言っておりますが，今日はお休みな<u>んです</u>。

・世界の捉え方

尾上（2004）は，モダリティが「話者の事態に対する捕（ママ）らえ方をその事態に塗り込めて語るときにその事態の一角に生じる意味」と述べている（p. 122）。モダリティに限定せずに「話者の捉え方」というものを考えた時には別の捉え方もありうるであろう。その一つとして「事態をそのまま」捉えるか「概念（思考）化して」捉えるかという捉え方の対立がありえよう。

・形態的対立

事態か概念かの区別が形態的な面から常に可能であるとは限らない。ノダを用いなくとも「ある思考を概念化して描く」ことは可能であるということである。

(57) 悠作「オレ，行かないよ」

保「なに言ってンの，家族旅行だよ」

悠作「勉強する」　　（(58) を一部変更）

(58) 悠作「オレ，行かないよ」

保「なに言ってンの，家族旅行だよ」

悠作「勉強するの」　　(http://www.plala.or.jp/ban/ps201.html，2008.9.24 閲覧)

(59) ［家はどこかと聞かれて］藤が丘です。

(60) ［家はどこかと聞かれて］藤が丘なんです。

・概念化して描かれていることのマーカー

当該命題が概念として描かれていることを表す述定型式の存在意義が認められる。そして，ノダ文はその「概念として描かれている」という描き方を担っていると推察できる。

②「解説する」ということ

1）［［[A ハ B ダ］ノ］ダ］という構造

・A と B とは個別の「事態」であるが，「A ハ B ノダ」が提示している［A ハ B ダ］は「概念」である。ノダが提示する命題（以後，C と称す）は「概念として」そこにある。

・したがって，仮に当該ノダ文が A ノダや B ノダという形で実現していたとしても，その音形こそ同じであれ，「命題 C イコール A または B」と考えることは妥当ではない。[1]

2）ノダが関与する「解説する」という行為の内実

・命題 C は事態 A や事態 B そのものを述べているのではなく，「AB 間に存在するとみられる何らかの関連」を述べている。「AB 間に何らかの関連があることを述べる一種の解説として」そこにある。

・しかし「AB 間に何らかの関連があることを述べる一種の解説」という理解は事態 A・事態 B・命題 C とを同時に関連づけた結果として後から出てくる理解であり，聞き手側から見た解釈である。

3）ノダの文法論的意味

・ノダ文は，命題 C をノで概念化しダで断定することで成立する。そこにノダの文法論的意味がある。

③「メタ言語的命題の承認」ということ

1）「書き換えや修正」ということ

・ある情報の関連性の持ち方には三通りがあった。それぞれにノダが使われる。

・「既存の概念を新しい概念に修正して受け入れる」場合と「既存の概念を強化して受け入れる」場合は，すでに存在する概念が書き換えられる。「AB 間に新たな関連を見出し，それを受け入れる」場合も「AB 間に関連を見出していない」という「無」の段階から「AB 間に新たな関連を見出した」という「有」の段階に変化するというように見なせば，やはり書き換えられていると言える。

2）「承認」ということ

・ノダ文を用いるとき，我々は「A から B を導き出す」のではなく「A と B から C を導き出し」，認識の書き換えを行っている。それは，「あるモノ・コト・カンガエ (A) と別のモノ・コト・カンガエ (B) との関連を命題 C という形で承認する」ことである。ノダ文を生み出す話し手にとって，命題 C を導き出す過程とは「A と B との関連を命題 C として承認する」過程であると言える。

---

[1] 先に触れた「解釈対象と解釈との類似性」という点を考えると，実際のノダ文では命題 C が「A ハ B ダ」という形で実現しない場合もありうるし，命題 C に A や B の内容が含まれない場合すらありうる。

３）「メタ言語的命題」ということ

・命題Ｃは A について述べたものでもあり，B について述べたものでもある。その点において命題Ｃは A や B という事態を描いている言語表現に対して「AB 間の具体的な関連のあり方」という観点から言語による別の形での記述を与えていることになる。

・命題Ｃは「AB 間の具体的な関連のあり方」をそのまま１つの事態として描くのではなく，一つの概念として描いている。

・つまり，Ｃは A や B より一段階高次に位置する「メタ言語的」表現である。命題Ｃが「メタ言語的命題」という特徴を有しているということは，「ノダ文とは『メタ言語的命題Ｃ』を掲げている文である」ということになる。

④ノダの文法的意味

１）ノダの文法的意味

ノダは「メタ言語的命題」の承認を要請する。

２）非ノダ文が後接する命題を「事態として」描いているのに対しノダ文の場合はその命題を「書き換えられるべきメタ言語的命題として」描いていることになる。先に「ある思考を概念化するのはなぜか」という問いを立てた。その答えは「メタ言語的命題として描くため」となる。

３）上に挙げた「ノダの文法的意味」は，ノダそれ自体は当該メタ言語的命題が「『何に対し』，『如何なる視点から』捉え直したものとして描かれているか」を示してはいない，ということも意味している。A や B や AB 間の具体的関連のあり方が言語形式によって明示されるとは限らないということである。したがって，聞き手は主題・文脈・発話状況などから，何に対するどのような観点からの解釈とするのが妥当であるかを推論することになる。そこから，一つのノダ文が語用論的に決定される多種多様な表面的意味を持つことになる。

5.2.2. 検証：異形態間の意味の違いをどう記述するか

①カモシレナイ<u>ノダ</u>／<u>ノ</u>カモシレナイ

それぞれ固有の描き方を表していると説明できる。例えば，(61) では「かもしれない」を含む部分までが「メタ言語的命題として」描かれ，それを承認していることになる。一方，(62) の場合は，「ーうまく働かなかった」までが「メタ言語的命題」であり，その命題をノダとカモシレナイとが一体となって承認していると考えることができる。

(61) 何かのトラブルで，出発が遅れたのか。ことによったら，出発間際か行動中に，酸素呼吸器が，うまく働かなかったかもしれない<u>のだ</u>。

(62) 何かのトラブルで，出発が遅れたのか。ことによったら，出発間際か行動中に，酸素呼吸器が，うまく働かなかった<u>のかもしれない</u>。　　（夢枕獏『神々の山嶺』，集英社）

(61) と (62) の承認の仕方（つまり，描き方）は異なる。(61) の描き方は当該メタ言語的命題が「承認される」という描き方で描いているのに対し，(62) の描き方は当該メタ言語的命題が「承認されうる可能性を有する」という描き方で描いていると考えることができる。

②ダロウとノダロウ

(63) Y さんから連絡ありますか？　彼女，帰国した<u>でしょう</u>？

(64) Y さんから連絡ありますか？　彼女，帰国したんでしょう？　(実例)

どちらも何らかの情報を手がかりにして推量されていることは同じだが（63）は「事態」が推量されており（64）は「メタ言語的命題」が推量されている。

(65) ウチの夫は，どうしてコレステロールたっぷりのメニューが好物なんだろう。ウチの妻は，どうして私の好きなトンカツをつくってくれないんだろう。

(朝日新聞 2001. 3. 23 朝刊掲載の企業広告)

(66) *ウチの夫は，どうしてコレステロールたっぷりのメニューが好物だろう。*ウチの妻は，どうして私の好きなトンカツをつくってくれないだろう。

推量された命題は「事態」ではなく「メタ言語的命題」としての性質を備えている。提示しているのは「どうしてー好物か」，「どうしてーくれないか」という「なぜ」という観点からの「解釈」であるからである。したがって，「事態を推量する」ダロウは使えない。一方，「の」と「だろう」とが両者一体となって「メタ言語的命題を推量する」という描き方を担っているノダロウは適格となる。

③さまざまなニュアンスのノダ文

１）話し手が得たばかりのメタ言語的命題を話し手が承認する。→発見，納得

(67) こんなところに喫茶店があったんだ。

２）話し手が得るべきメタ言語的命題を話し手が承認する。→自分への説明，強調

(68) ［受験生が自分に言い聞かせている］絶対合格するんだ。

３）聞き手が得るべきメタ言語的命題を話し手が承認し，聞き手にも承認を要請する。→説明，強調

(69) ［(67)を発した相手に］先月できたんだ。

(70) ［何度言ってもわからない相手に］だから，無理なんだって。

４）聞き手が取るべき行動に言及するメタ言語的命題を話し手が承認し，聞き手にも承認を要請する。→命令・忠告

(71) ［セコンドがボクサーに］立て！　立つんだ！

６．まとめ：文法論的意味と語用論的意味の区別

①語用論の視点を取り入れることによって，関連づけの内実を記述することができたり，ノダ文の持つ種々のニュアンスはどこから生じるのかを説明できたり，ノダの使用条件をより詳細に記述したりすることができた。つまり，ノダの意味・機能をより明確に記述することができた。

→ノダの意味を考える際，語用論的視点を取り入れることは有益である。

②語用論的意味を明らかにすることによって文法論的意味がより明確になった。

→ノダの文法論的意味を考える際，語用論的視点を取り入れることは有益である。

③文法論的意味と語用論的意味を関連させつつ区別することによって，ノダの異形態やさまざまなニュアンスのノダ文をさらに包括的に記述することが可能になった。

→ノダの意味を考える際，語用論的視点を取り入れることは有益である。

④文の意味を考える際，語用論的視点を取り入れることは重要であると考えられる。特に，ノダのよ

うな文法論的には抽象的な意味であるにも関わらず，語用論的には豊かな意味を持つ言語形式の考察には語用論的視点からの考察が欠かせないと思われる。

参考文献

庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2000）松岡弘監修『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』，スリーエーネットワーク.

今井邦彦（2001）『語用論への招待』，大修館書店.

内田聖二（1998）「『(の)だ』-関連性理論からの視点-」，小西友七先生傘寿記念論文集編集委員会編『小西友七先生傘寿記念論文集　現代英語の語法と文法』，大修館書店，pp. 243-251.

大鹿薫久（1995）「本体把握-「らしい」の説-」，『宮地裕・敦子先生古希記念論集　日本語の研究』，明治書院，pp. 525-548.

大鹿薫久（2004）「モダリティを文法史的に見る」，北原保雄監修，尾上圭介編集『朝倉日本語講座６文法Ⅱ』，朝倉書店，pp. 193-214.

尾上圭介（1990）「文法論-陳述論の誕生と終焉-」，『国語と国文学』67-5，東京大学国語国文学会，至文堂，pp. 1-16.

尾上圭介（2004）「述語論の方法」，『日本言語学会夏期講座 2004 Seminar handbook』，日本言語学会夏期講座配付資料，pp. 115-140.

尾上圭介・坪井栄治郎（1997）「モダリティをめぐって」，『言語』26-13，大修館書店，

武内道子（1994）「関連性に関する制約-『のだ』をめぐって-」，『ふじみ』16，富士見・言語文化研究会，pp. 3-16.

田野村忠温（1990）『現代日本語の文法Ⅰ』和泉書院.

田野村忠温（2004）「現代語のモダリティ」，北原保雄監修，尾上圭介編集『朝倉日本語講座６　文法Ⅱ』，朝倉書店，pp. 215-234.

名嶋義直（2002a）「『説明のノダ』再考-因果関係を中心に-」『日本語文法』2-1，日本語文法学会，pp. 66-88.

名嶋義直（2002b）「ノダ文の認知語用論的研究-関連性理論の観点から-」，未公刊博士論文，名古屋大学.

名嶋義直（2003）「いわゆる「論述文」におけるノダの使用条件-学習者の作文を中心に-」『日本語教育』118，日本語教育学会．pp. 37-46.

名嶋義直（2007）『日本語研究叢書 19　Frontier series ノダの意味・機能-関連性理論の観点から-』，くろしお出版.

名嶋義直（印刷中）「ノダの文法的意味の記述に向けた試み（その１）-果たしてノダは『説明のモダリティ』か-」，『文化』第 71 巻１・２号，東北大学文学会.

野田春美（1997）『の（だ）の機能』くろしお出版.

野村剛史（1991）「助動詞とは何か-その批判的検討-」，『国語学』165，国語学会，pp. 38-52.

野村剛史（2003）「モダリティ形式の分類」，『国語学』54-1，国語学会，pp. 17-31.

益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版.

益岡隆志（2007）『日本語モダリティ探求』くろしお出版.

山口佳也（1975）「『のだ』の文について」，『国文学研究』56，早稲田大学国文学会，pp. 12-24.

山田孝雄（1908）『日本文法論』，實文館.
山田孝雄（1936）『日本文法学概論』，實文館.
吉田茂晃(1988)「ノダ形式の構造と表現効果」,『国文論叢』15,神戸大学文学部国語国文学会,pp.46-55.
吉田茂晃（2000）「＜ノダ＞の表現内容と語性について-＜ノダ＞は『説明の助動詞』か-」,『山邊道』,天理大学国語国文学会，pp.17-31.
Blakemore, Diane (1987) S*emantic Constraints on Relevance*. Blackwell, Oxford.
Blakemore, Diane (1988) "'So' as a constraint on relevance." In Ruth M, Kempson ed. *Mental representations : the interface between language and reality*, Cambridge University Press, Cambridge : 183-195.
Blakemore, Diane (1992) *Understanding Utterances*. Blackwell, Oxford. (武内道子・山崎英一訳『ひとは発話をどう理解するか』，ひつじ書房，1994).
Sperber, Dan & Wilson, Deirdre (1986) *Relevance: communication and cognition*. Blackwell, Oxford. (内田聖二他訳『関連性理論-伝達と認知-』，研究社出版，1993).
Sperber, Dan & Wilson, Deirdre (1995) *Relevance: communication and cognition*. Blackwell, Oxford. (内田聖二他訳『関連性理論-伝達と認知-』第２版，研究社出版，1999).